

「民衆はメシアを待ち望んでいて、ヨハネについて、もしかしたら彼がメシアではないかと、皆心の中で考えていた。16 そこで、ヨハネは皆に向かって言った。「わたしはあなたたちに水で洗礼を授けるが、わたしよりも優れた方が来られる。わたしは、その方の履物のひもを解く値打ちもない。その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる。17 そして、手に箕を持って、脱穀場を隅々まできれいにし、麦を集めて倉に入れ、殻を消えることのない火で焼き払われる。」18 ヨハネは、ほかにもさまざまな勧めをして、民衆に福音を告げ知らせた。19 ところで、領主ヘロデは、自分の兄弟の妻ヘロディアとのことについて、また、自分の行ったあらゆる悪事について、ヨハネに責められたので、20 ヨハネを牢に閉じ込めた。こうしてヘロデは、それまでの悪事にもう一つの悪事を加えた。21 民衆が皆洗礼を受け、イエスも洗礼を受けて祈っておられると、天が開け、22 聖霊が鳩のように目に見える姿でイエスの上に降って来た。すると、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声が、天から聞こえた。」

【説教】

今日の聖書の言葉は、イエスさまが洗礼を受けられたところが記されています。ヨルダン川のほとりで人々がみんな洗礼を受けている時、同じようにイエスさまも洗礼を受けられました。人々は一体どのような理由があって洗礼を受けていたのか。そしてイエスさまもどのような目的のために、洗練を受けられたのでしょうか。

ルカによる福音書のこの箇所は、イエスさまの洗礼を受けることと、私たち一般の者たちの受洗を分けて別のものとしては捉えていません。むしろイエスさまが洗礼を受けることは、私たちの洗礼と共通した事柄があるのだということを示そうとしていると考えられます。そこでどうしてイエスさまが洗礼を受けたのか、そのことを知ることによって、一般の私たちの洗礼をすることの意味を改めて考えることができますと思います。

17 節の所にこのようにあります。これはイエスさまに洗礼を授けたヨハネという人物の語った言葉です。「手に箕をもって脱穀場を隅々までに綺麗にし、麦を集めて倉に入れ殻を消えることのない火で焼き払われる。」箕というのは麦などの穀物を、籾殻と分けるザルのような道具ですね。麦の実の方は集めて蔵に入れ、不要な籾殻の方は集めて火で燃やしてしまう、そういうことをヨハネはいつてるわけです。これは文脈を無視して あるいは聖書全体の言ってることをあまり考えなければ、やはり大変恐ろしい裁きの意味合いが込められているように聞こえます。「さて自分はよく実った良い実の方だろうか、それとも消えることのない火で焼き払われるしかない籾殻の方なのであろうか。」そのように誰もが緊張せずには聴くことのできない厳しい言葉であります。イエスさまも、そして人々もみな籾殻として永遠の火で焼き払われることのないために、洗礼を受けたのでしょうか。それとも他に何か違った目的があったのでしょうか。

このルカによる福音書もそうなのですが、福音書は全てイエスさまの洗礼は最初の方にあります。つまりスタート地点にあるわけです。自分が救われるため、地獄に行かないために何とかして努力して、立派な行い

を天に積んで最後にようやくたどり着くゴールなのではありません。聖書に記されているイエスさまの姿を追って行きますと、そのような自分の救いというものを求めていると感じさせる所はありません。洗礼を受けられてからずっとイエスさまの心を占めていたのは、もっぱら他の人々の救いのことであります。では、自分の方とは言いますと、これはもう最初に洗礼の時にこう言われていますね。聖霊が鳩のように降り、天が開けて父なる神の声がこう言います。「あなたはわたしの愛する子 わたしの心に適うもの」という言葉です。つまり自分の救いというのはもうここで決まっています。洗礼を受けるということは、神の子となるということの、神に従い神の御心に沿って生きようとする決意の現れであるわけです。その後うまくいかなくて、なかなか御心に沿うことができなかつたとしても、天の父は自分の方に目を向け、心を向けたこと、それだけでも「良し」としてくださるわけです。自分の人生を、目に見ることの出来ない不確かな神という存在に委ねたこと。これだけでも本当に勇気のいることで、大変な覚悟のいることです。「わたしの心に適う」というこの言葉のは直訳すると喜ぶという言葉です。神さまは、私たちの人生の同伴者として、ご自分を受け入れたというその事実をもって喜ばれるのです。ですので自分が救われるかどうか、死んだ後に永遠の命に入れるのかといった意味での救いに関しては、もう最初に全て決着がついています。未来に受けるはずの最後の審判を、今、このイエス・キリストの守りの中で、最初に受けてしまおうというのが、イエスさまの洗礼の新しさであります。イエスさまが洗礼後に歩まれたように、自分のことは大丈夫ですからもう横に置いて、ただただ神の御心に生きること、他の人々を一人でも多く苦しみから、罪と死の力から救い出すことに心を満たせば良いのですね。

聖書が示す洗礼というのは私自身の救いの終わりであり、同時に他の人々の救いへの始まりであります。このことをよく表している例として一人の女性の信仰者のことをご紹介します。その女性の名前はテレーズ・マルタンと言いまして 19 世紀後半のフランスの修道女、シスターであります。マザー・テレサという方のお名前はよくご存知だと思いますが、そのテレサの名前の由来になったのがこのテレーズです。マザー・テレサといえば大変な事業を成し遂げ、大きな業績を挙げたことで有名です。しかし一方でこのテレーズの方はそのような華やかな人目を引く何の業績も残していません。若くして 24 歳で天に召されています。そのようなごく小さな一人の女性が、マザー・テレサやそして多くの人々の心を捉え影響を与えてきました。その理由は何だったかということですが、テレーズは次のような信仰の生涯を送りました。

テレーズは幼い頃より感受性が強かったといいます。罰への恐れのためあれも罪ではないか、これも罪ではないかという思いにいつも苛まれていました。他の人の心を痛めるようなことでもあれば、大きな罪を犯してしまったと悩み、罪責の思いに苦しみます。人よりも目立ちたい、よく思われたいと言う虚栄心にも苦しみ、そのような自分の心を醜いと涙を流していました。嫌と言いだしたらどんなことがあってもはいと言わないような強情さと頑固な性質もありました。そのような偏った自分の欠点を思うと、とても神さまの御心に沿うことはできないと苦しんでいたのです。テレーズを指導する司祭は、その姿を見かねてもっと神の恩寵に目を向けなく

てはならないと諭したほどでした。

そんな時、とうとうテレーズは自らの信仰の道行きに挫折してしまいます。このままいくら努力しても、どんなに良い実をつけようとがんばってみても、神の正しさに達することはできないと悟ったのです。いかに自分が小さく力のない人間なのかということが、痛いほどわかってしまいました。自ら階段を上って神に近づくということが、実はできないのだと分かってしまったのです。しかしそんな時思いもよらないことが起こりました。神さまがいらっしゃる所に登って行く階段を1段も登れずに、その前にうちひしがれて倒れている自分のところになんと神さまが降りて来られたのです。その手を取ってからだを起こしてくれる神さまと、テレーズは出会ったのです。

テレーズは神の恵みによる救いということが、初めて本当の意味で分かりました。そうしてテレーズは、「神のいつくしみ深い愛にいけにえとして我が身を捧げる祈り」という祈りを捧げます。その祈りは、自分が神の正しさを満たすことができないという自覚のもとで、もうこれは仕方ないと諦めるというものでした。今からは神の恩寵だけに、神のいつくしみ深い愛だけに自分のすべてを捧げるという祈りです。その祈りの中でテレーズはこう言っています。「弱さのゆえに時に過ちに陥ることがあれば、すぐに主の尊い眼差しが私を清めてください。聖霊の火、炎によって、私の全ての不完全さを焼き尽くしてくださいますように。」そう言って、神の裁きの炎を、信仰する者を生まれ変わらせ造り変えていく大変積極的なものとして捉えるようになりました。テレーズはこの消えることのない火、炎を、「神の愛のかまど」とか、「聖なるかまど」と言って大変身近な喜びのものとしてとらえるようになります。自分が犯すどのような小さな罪に対しても、あれだけ神の罰を恐れ、不安にさいなまれていたテレーズは、すっかり変わってしまいました。「たとえ過去の過ちを思い出し、胸が苦しくなりそうなときにも、愛のかまどにそのことを放り込んでしまえば、永久に燃え尽くさずにはいられないでしょう」と言うようになります。そしてまた、こうも言います。「私もよく弱さに陥ることがありますがそれに私は決して驚きはしません。自分が弱く小さいものであるのを感じることは何と楽しいことなのでしょう。」そのように語るテレーズはもはや、永遠に消えることのない地獄の炎を恐れる思いは、心の中にこれっぽっちもありません。

そして、その代わりにテレーズの心を占めていったものは隣人の救いのことでありました。ある同僚の修道女がかつてのテレーズと同じように神の裁きを大変恐れていました。彼女はどんなに長い間修道生活を送ったとしても、地獄へ落ちることから逃れることはできそうにありませんと言います。それに対してテレーズはこう答えます。「私はそのようなことにはもう恐れません。なぜならば私たちは地獄に落ちるにはあまりにも小さすぎるからです。小さい子どもは決して落ちることはありません。」そう言って、おびえる彼女を励ました。そしてまたある他の修道女が、大変な困難に出会ってどうして良いのかわからなくなり、テレーズに相談したことがありました。すると、テレーズはこう答えます。「どうしてあなたは、そんな高いところを乗り越えようとするのですか。上を乗り越えるのではなく、その下をぐり抜ければ良いのです。人生の中で嵐に遭うとき、雷が

鳴って怖いとき、雲の上を飛び越してゆくことは出来ません。私たちのような小さな者にとっては、辛抱して雨をたえ忍ぶしか道はないのです。後で、愛の太陽の光で乾かせば良いのです。」そう言って困難に負けそうになっている隣人を力付け励ました。

テレーズのこの大きな転換は、ちょうど全ての信仰者に当てはめられると考えられます。私たちが洗礼を受ける時に、このテレーズが長い戦いの末にたどり着いたところからもし始めることが出来れば、余計なことで悩まずにすみますし、自分の救いということに囚われて不自由になることはありません。キリストの授ける聖霊と火は恐ろしいものではなく信仰者にとって大変楽しく喜ばしいものなのだとわかっていたら、もっともっと積極的に生きることが出来るはずです。一人一人を丁寧に大切に養ってくれるのが、キリストの授けてくださる愛のかまどの炎であります。私たちの弱さや欠点を燃料として、神の愛は燃え続けます。そしてその炎によって練られ鍛えられて、少なからず人々を神の愛に導くことに役立せることができます。洗礼は、単にその人を救うために、神が授けるものではないのですね。その人を通して、すくなくとも周りの人々救おうとしている神の計画の中で、授けられるものなのです。私個人の人生の転換点であるというだけでなく、神の愛がこの地上に根付いて行くための転換点でもあるのです。イエスさまが人々共に受けてくださったこの洗礼に、心より感謝して喜びたいと願います。